

## 【論文】

## 聴覚障害児を対象とした作文指導研究序論

## ーその研究動向と視覚的情報活用の提起ー

○檜 垣 栄 慈

愛知教育大学大学院教育学研究科後期1年博士課程

## 要約

本研究は、聴覚障害児の作文指導について、論文検索データベース・J-STAGEにより抽出された論文を概観し、聴覚障害児を対象とした作文の指導に関する研究の動向からみえる作文指導の実際と課題を明らかにすることを目的とした。採用した論文を整理した結果、全般的にことばの遅れや偏り、文構造と文法的誤りに関する内容が多く占められていた。文法指導や語彙の拡充においては、早期に文字情報を活用したり手話を使用したりすることの効果が多く示されていた。作文指導では、文字や手話または絵や図など視覚的情報を活用した指導を児童の実態に即して行うことが重要であることを明らかにした。今後、文章レベルでの作文指導において作文のプランニングと作文内容のモニタリングをする力を育てていくために、作文内容を視覚的に捉えることができるような視覚的情報を活用した指導法を検討していくことを課題として挙げた。

## キーワード

聴覚障害児, 作文, 指導方法, 視覚的情報活用

## はじめに

健聴児と聴覚障害児の言語発達を比較した場合、聴覚障害児の方がことばの量と質に遅れが生じやすく、誤用も目立つことが指摘されている。やがて、状況の文脈に依存しないことばの文脈での表現においても困難さがみられるようになると考えられる。聴覚障害児の話しことばについて、長崎ら(2000)は、健聴児と難聴児における報告の構成と内容について分析した。難聴児の特徴として、主体が不明確な出来事やテーマから逸脱した内容が出現しやすい、他者に関する言及が少ない、心的状態への言及が少ないという傾向を認めた。さらに、聴覚障害児の書きことばについては、田中・斎藤(2007)は、語彙の不足、助詞の誤用、動詞の産出困難、自分の思考や感情を表現することの困難、表現がパターン化して広がらないことを指摘した。聴覚障害児に対する言語指導では、聴覚的に全ての音声情報の受容が困難であることを踏まえ、視覚的教材や補助教材を駆使するなどコミュニケーション手段の適切な選択を図ることが重要である(国立特別支援教育総合研究所:2010)。さらに、聴覚障害児の言語発達は、教育や家庭環境、平均聴覚レベル、コミュニケーション手段、補聴機器の装着時期などにより個人差が大きいため、個々の能力に応じた多様な指導が求められる。しかし、聴覚障害児を対象とした文章レベルでの多様な作文指導方法が明らかにされていない。そこで、聴覚障害児を対象とした作文の指導に関する研究の動向からみえる作文指導の実際と課題を明らかにすることを目的とした。

本研究では、「聴覚障害児」「作文」「指導」の三つをキーワード<sup>1)</sup>として、論文検索データベース・J-STAGEにより抽出した論文を分析対象とした(2018年6月1日)。データベース検索から抽出した論文の分類までの手順をFig.1に示す。まず、抽出した論文57件のうち、次の二つの採用基準を用いてスクリーニングを行った。①聴覚障害児における作文や書きことばへの言及がある。②論文の種類は原著に限定せず、学会発表などの抄録を含める。その

結果、25件の論文を選定し、本文を精査した。除外した論文は32件あった。次に、採用した論文の「テーマ」「スタイル」「対象者」「著者・発表年・題名」を発表年順にTable 1(発表年が1980年から1999年まで)とTable 2(発表年が2003年から2017年まで)にまとめた。さらに、テーマごとに分類した結果、「作文」7件、「文法」7件、「語彙」5件、「言語発達」4件、「その他」2件あった。研究スタイルごとに分類した結果、「指導」11件、「分析」7件、「比較」4件、「アンケート調査」1件、「その他」2件あった。これらを組み合わせた件数をTable 3にまとめた。

## 1 採用した論文の分析

## (1) 作文指導に関する研究動向の分析

小林・田中(1986)は、難聴学級児童(15名)に対し、3年以上の期間にわたり1年に一回、5枚のストーリーをもった絵についての話を書かせるという同一の課題で作文検査を実施した。対照群として、小学校2, 4, 6年の同一学級の児童にも同じ検査を実施した。その結果、①難聴児の作文能力には学年の上昇に伴う発達がみられるが、健聴児と比較すると文法的側面で特に劣っている。②難聴児の同学年の間での作文能力の順位は、学年が上昇してもあまり変動しない。③作文能力の経年的変化には、読書力や平均聴力レベルにより異なる特徴がみられることを示した。

小池(1995)は、作文の評価は評価者によって変動する場合が多く複雑であるとし、評価の多様性の解明を試みた。10篇の作文(学生10名)と、それを評価する多様な8グループを定めた。共通性として、きちんと書かれた作文を評価していた。①職場クラスタ(企業エンジニア・私大学生):基盤作文力の強・弱の各々において、外向性の作文を高く評価する。②教育クラスタ(短大教官):その正反対に内向性の作文を高く評価する。③人事クラスタ(人事マネージャ):基盤作文力の強・弱に応じて、評価を使い分ける。④日常クラスタ(短大シニア・短大ジュニア・企業マネージャ・主婦):単純に基盤作文力の強・弱で評価する。四つの

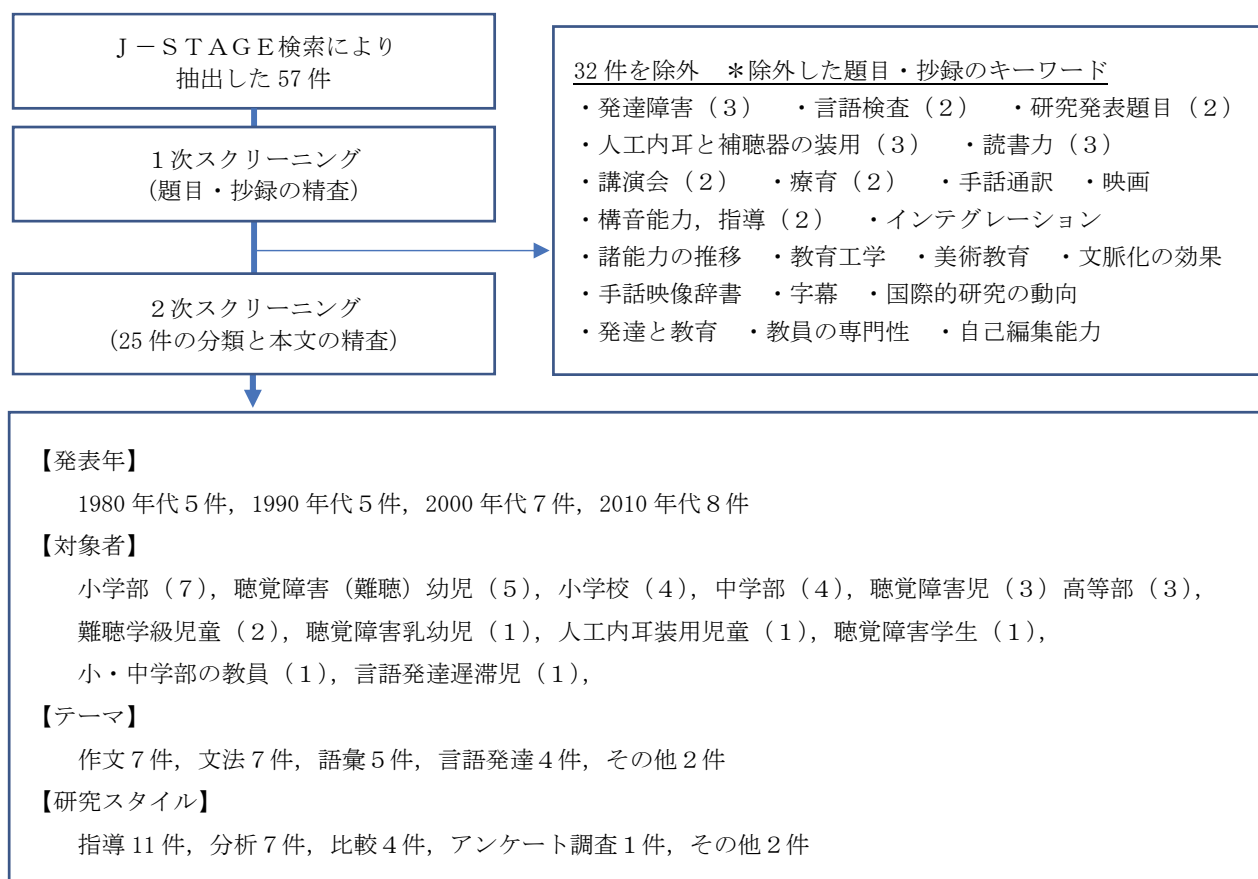


Fig.1 論文抽出から採用, 分類までの手順

Table 1 採用した論文の一覧 (発表年が 1980 年から 1999 年まで)

テーマ	スタイル	対象者	著者・発表年・題名
文法	指導	小学部	保坂真理 (1980) 聴覚障害児における構文の指導について (1); 単文の習得
語彙	比較	小・中学部 小学校	関圭子・草薙進郎・都築繁幸 (1982) 聴覚障害児の語彙理解における単語分類能力と単語理解能力との関係について
言語発達	指導	言語発達 遅滞児	小島千枝子・横地健治・岡田真人 (1983) 聴覚言語理解の障害と発語失行をあわせ持った言語発達遅滞の 1 例
言語発達	指導	聴覚障害 幼児	能登谷晶子・鈴木重忠 (1984) 難聴幼児の言語発達と文字言語の役割
作文	比較	難聴学級児童 小学校	小林はるよ・田中美郷 (1986) 難聴学級児童の言語力の経年的観察 (2)
文法	指導	難聴幼児	倉内紀子 (1992) 高度難聴児の言語指導プログラムとその検証: 語連鎖の獲得過程を中心に
文法	指導	難聴幼児	能登谷晶子・鈴木重忠・手取屋浩美・古川侃 (1992) 早期から手指法を導入した重度聴覚障害幼児 2 例の言語発達
作文	分析	聴覚障害学生	小池将貴 (1995) 多様な評価者による聴覚障害学生の作文の評価
語彙	指導	高等部	長南浩人 (1997) 手話を利用した日本語の語彙指導に関する事例研究: 副詞の指導について
文法	分析	小学部 中学部	龍崎麻由実・伊藤友彦 (1999) 聴覚障害児の受動文における統語知識: 項構造と句構造を中心にして

Table 2 採用した論文の一覧 (発表年が2003年から2017年まで)

テーマ	スタイル	対象者	著者・発表年・題名
語彙	指導	高等部	長南浩人 (2003) 聾学校高等部生徒の日本語の語彙指導における手話使用の効果
その他	論評	聴覚障害児	齋藤佐和 (2006) コミュニケーション方法とリテラシー形成 (特別発言)
言語発達	分析	聴覚障害乳幼児	斎藤宏・工藤多賀・堀内美智子・小寺一興 (2006) 補聴器装用児における乳幼児期の言語訓練の成果と問題点
作文	アンケート調査	小・中学部の教員	田中耕司・斎藤佐和 (2007) 聴覚障害児の書記表現力の指導に関する調査
作文	分析	聴覚障害児	廣田栄子・小渕千絵・木暮由季 (2007) 聴覚障害児における物語産生能力の評価法の検討
作文	分析	小・中学部・高等部	大森梨早子・澤隆史 (2008) 聴覚障害児童・生徒の書く文の発達的变化；文構造と容認性の観点から
その他	言語学的研究	聴覚障害児	澤隆史 (2009) 聴覚障害児の言語の理解と産出に関する言語学的研究
文法	分析	中学部	澤隆史 (2010) 聴覚障害児の作文における格助詞の使用と誤用：深層格の視点から
作文	分析	小学部	茂木成友・澤隆史・四日市章 (2012) 重度聴覚障害児童における表記上の誤りの発達的变化
語彙	指導	人工内耳装用児童	橋本かほる・能登谷晶子・原田浩美・伊藤真人・吉崎智一 (2012a) 幼児期金沢方式による言語訓練中に人工内耳を装用した12例の就学後の問題
文法	指導	聴覚障害幼児	橋本かほる・能登谷晶子・原田浩美・伊藤真人・吉崎智一 (2012b) 金沢方式による言語指導を受けた聴覚障害幼児4例の格助詞の獲得
言語発達	指導	難聴学級児童	森つくり・熊井正之 (2012) 補聴器装用の先天性重度聴覚障害児童への就学後の言語指導と言語発達経過：就学後に言語指導を継続した1例と中断した1例の比較
文法	指導	聴覚障害幼児	原田浩美・能登谷晶子・橋本かほる・伊藤真人・吉崎智一 (2013) 聴覚障害幼児への文の指導：幼児期に助詞を含む文の習得の可能性について
作文	比較	小学校小学部	佐々木志保・小渕千絵・川瀬哲明 (2016) 学童期における書記言語能力の発達に関する検討：定型発達児と聴覚障害児のまんがの説明課題での比較から
語彙	比較	小学校小学部	佐々木志保・小渕千絵・川瀬哲明 (2017) 学齢児における副詞表現の発達：聴児と聴覚障害児の比較から

Table 3 テーマと研究スタイルの組み合わせ

テーマ	研究スタイル	件数
作文 (7件)	分析	4
	比較	2
	アンケート調査	1
文法 (7件)	指導	5
	分析	2
語彙 (5件)	指導	3
	比較	2
言語発達 (4件)	指導	3
	分析	1
その他 (2件)	論評	1
	言語発達の研究	1

評価クラスタに分解することにより評価の多様性を説明した。

田中・斎藤 (2007) は、聴覚障害児の書記表現力の指導の実態に関して現状を把握するため、全国の聾学校小学部・中学部を担当する教員 127 名を対象にアンケート調査を行った。その結果 (有効回答 92 名)、①書記表現力指導は、教科指導の一環として行われる「国語科」の時間内だけでなく、「自立活動」や「放課後・昼休み」など教科外でも指導の機会が頻繁に設けられていた。②「日記」や「感想文」など児童生徒の書記表現力の基礎を形成するために効果的と考えられる教材が選択されていた。③評語による指導が中心となっており、児童生徒が書記表現力について抱える困難に即した指導が行われていた。④単に意欲の喚起にかかわる動機付けの側面だけでなく、語彙・文レベルの指導から文章レベルでの指導まで幅広く行われていた。⑤評価方法としては、指導と合わせる形で評語による評価が主に行われていたと報告した。

廣田ら (2007) は、聴覚障害児における物語産出表記について、テキストマイニング分析を用いた評価手法について検討した。先天性聴覚障害児 92 例に対して、5 場面からなる絵図版 (兎、猫、犬、豚、象が順に登場してシーソーに乗り、最後に象の反対側に 4 匹が乗っても象が重かったという内容) を提示し、作文用紙に自由に表記を求めた。その結果、①計量分析では、発達と共に増加する傾向を認めた。②主題分析では、1 年の主題は、軽重が多く、2 年では軽重と位置、4 年では軽重と心理、5 年は心理が増大し順序が低下した。中学生の主題では、心理が増大し、それ以外は全て低下した。③係り受け分析では、名詞+動詞の係り受けが最も多かった。発達的には、形容詞+動詞の関係が 1 年生から順次増加し、それ以外については、変化はなかった。④動詞形態素の意味分析では、理由の使用で 1 年から 4 年にかけて著しく増大した。また、高学年になると心理的な状況に理由が用いられるようになったことを示した。

大森・澤 (2008) は、聾学校に在籍する小学部、中学部、高等部の児童および生徒 (計 97 名) が書いた文 (116 篇) の発達的变化について、複雑さ、正確さ、およびその関連から検討した。その結果、文の複雑さは小学部から高等部にかけて徐々に増加していくが、比較的単純な構造を有する複文が多かったことを指摘した。

茂木ら (2012) は、聾学校の小学部児童 179 名が書いた作文 212 編を対象に、表記の誤りとその発達的な変化について検討した。低・中・高学年別に品詞別の分析を行ったあと、作文にみられた表記の誤りを、①子音の誤り、②母音の誤り、③撥音の誤り、④促音の誤り、⑤拗音の誤り、⑥長音などに関する表記の誤り、⑦濁点の誤り、⑧その他の誤り、の 8 項目に分類し分析した。その結果、濁点の誤りは児童期全般にみられる誤りであるが、他の特殊音節の表記の誤りは学年を追って減少していくことを明らかにした。

佐々木ら (2016) は、定型発達児 17 名と人工内耳装用の聴覚障害児 4 名を対象に、標準失語症検査 (SLTA) 補助テストの下位項目であるまんの説明から 2 題の説明課題を行った。その結果、①計量的側面: 文数と字数は 1 年から 3 年までは学年が進むにつれて文数は増加し、1 文あたりの字数の増加がみられた。聴覚障害児の文数は、定型発達児と同程度であったが、1 文の長さは 4 名中 3 名で同学年児よりも短かった。②形式的側面: 接続表現や副詞表現の使用について、定型発達児は 3 年生以降でが多くみられ、接続表現の中では展開「そして」や逆接「しかし」「それでも」の使用が多かった。一方、聴覚障害児では、使用がみられても文内での整合性に欠ける使用がみられ、

十分な習得に至っていないことを推測した。また、聴覚障害児は表記上の誤りが多い傾向がみられた。③内容的側面: 定型発達児では全学年に共通して基本語の欠落はいくつかみられたが、1 年生ではより多く、さらに文構造の単純さ、主題説明の不十分さも他学年に比べて多くみられた。一方、聴覚障害児は、高学年であっても基本的な語彙や表現力の不十分さがみられた。個々の発達状況に合わせ、表現力を伸ばすための支援が必要であることを示した。

## (2) 文法に関する研究動向の分析

保坂 (1980) は、格助詞の習得を目指した単文の指導プログラムを作成し、聴覚障害児 7 名 (小学部 4 年生) を実際に指導した。指導プログラムでは、格助詞の機能が明確に示せるのは可逆能動文であるとして、相互に交換可能な二つの名辞を含む文を指導材料とし、単に格助詞を単独に指導するのではなく、格助詞が変われば文の意味が変わるということを絵や実物を提示することによって理解させるという手続きをとった。指導前、指導直後、指導後 3 か月にテストを行い指導の良否を検討した結果、7 名中 3 名に有意な改善があり、その効果は 3 か月後も持続したことを示した。

倉内 (1992) は、文構造 (語連鎖) の獲得に焦点をあてた総合的な言語指導プログラムを開発した。対象は平均聴力レベル 95dB 以上の先天性感音難聴児 4 名であり、2 歳前後から本プログラムに基づいて言語指導を開始した。その結果、およそ 3 歳までに、言語記号の理解と表出が困難な前記号的段階から、同年齢の健聴児に匹敵する 3 語文の理解と産出が可能な段階に到達した。特に、発見が遅れて 2 歳代で指導を開始するような高度難聴児の場合、初期の段階で言語記号とそれが表す意味との関係を確実に成立させることが重要であり、その後は、必ずしも健聴児の順序性によらずに、年齢に匹敵する文構造を同時期に導入することによって、言語獲得を促進できる可能性があることを示唆した。

能登谷ら (1992) は、0 歳代と 1 歳代から文字音声法と手指法を併用して指導した重度聴覚障害幼児 2 例の、手指言語と音声言語の発達を、助詞及び疑問詞の初期の獲得を中心に検討した。その結果、2 例の言語発達は、手指による表出が音声言語より先行した。初期における手指による始語、文、助詞及び疑問詞の初出時期は、ほぼ健聴児の発達に匹敵していた。手指法の導入は、難聴幼児の言語発達の上で最も大きな問題である語彙の初出時期の遅れと、使用頻度の少なさを補う可能性があり、言語指導法の一つとして有用であることを示唆した。

龍崎・伊藤 (1999) は、聾学校に在籍する聴覚障害児 90 名を対象に、受動文に対する言語知識の特徴を項構造と句構造という視点から検討した。直接受動文、述語が自動詞の間接受動文、述語が他動詞の間接受動文の動詞のみを提示し、名詞句 (文節) を自由に記入させた。その結果、正答者の割合は著しく低かったが、誤用の生じた反応の中にも項構造 (名詞句数と意味役割) は正しい反応が多く存在すること、さらに項構造のみならず、句構造 (D 構造) も正しい反応が存在すること、などを明らかにした。これらの結果から、受動文の獲得段階として、①項構造の獲得、②句構造 (D 構造) の獲得、③句構造 (S 構造) の獲得、④格助詞の獲得、の 4 段階が少なくとも存在することを示唆した。

澤 (2010) は、聾学校中学部生徒 50 名の作文で使用されている 9 種類の格助詞を全て抽出し、正用と誤用に分類した。さらに、格助詞が表す深層格ごとに正用数、誤用数、誤用の特徴について分析した。その結果、同一の格助詞でも表示する深層格によって正用数の差が大きいことを示した。また誤用の特徴について分析した結果、正用数が多



く、表示できる深層格の種類が多い格助詞において誤りも多く生じること、同じ深層格を表示する格助詞の間で置換の誤りが生じやすいことを示した。

橋本ら(2012b)は、0歳代から金沢方式(文字・音声法)で言語訓練中の聴覚障害幼児4例を対象に、日本語対応手話に指文字または手話による助詞が挿入された文に含まれる格助詞の出現時期について検討した。その結果、①格助詞の初出年齢は1歳11か月から2歳2か月で、健聴児の時期とほぼ同時期であった。②4例ともに共通して初出した格助詞は「を」であった。③聴覚障害児であっても、幼児期早期より日本語の文構造に沿った日本語対応手話による単語(助詞は指文字または手話)を用いることにより、健聴児の助詞の発達に沿った理解・表出が可能であったことを示唆した。

原田ら(2013)は、重度聴覚障害幼児1例を対象に、1歳前から2歳3か月までの手話による文の指導を後方視的に検討した。特に文の発達支援のために、親による子どもの行動発達記録と、助詞抜け文の記録を用いて分析した。その結果、①1歳6か月で手話による助詞抜け2語連鎖が出現して以降、親に対し、10種類の助詞を含むさまざまな文での話しかけを指導することができた。②親による子どもの行動発達記録を用いて、2歳3か月までに14種類の助詞を含むさまざまな文での話しかけを指導することができた。③2歳2か月から2歳3か月までに11種類の助詞入り文を表出した。表出された助詞のなかの8種類が格助詞であった。④親による子どもの文や行動発達記録を基に、幼児期でも適切な助詞入り文での話しかけができる可能性があることを示した。

### (3) 語彙に関する研究動向の分析

関ら(1982)は、聴覚障害児の語彙理解の特徴を明らかにするために、聴覚障害児(9~16歳)123名と健聴児(6~12歳)119名に単語分類課題(仲間外れの言葉を探す)と単語理解課題(正しいものに丸印を付ける)を実施した。その結果、単語分類課題では、聴覚障害児の中学部段階においても健聴児の高学年の成績にも及ばず、語彙力の低さが示された。単語理解課題では、聴覚障害児の中3段階においても健聴児の小2段階に及ばず、聴覚障害児の語彙力の低さがより顕著に示された。単語理解課題の成績に基づいて単語分類課題をみた場合、両群ともに単語理解課題の成績の高いグループほど形態に基づく反応が減り、意味に基づく反応が増えるという傾向が示され、語彙力に劣る者は、ただ単に単語の意味が分からないだけではなく単語の形態的特徴に依存している傾向があることを示した。

長南(1997)は、聾学校高等部生徒の副詞の語彙を増加させることを目的として、①主に文字・音声を利用し、指導者の解説などに手話を利用する条件と②文字・音声に学習者自身が使用した手話表現を加え、それを日本語に変換し、指導者の解説などにも手話を利用する条件で指導を行い、それぞれの効果を検討した。その結果、手話の副詞的表現が多い学習者は、指導条件②の後のテストで成績が向上したが、手話の副詞的表現が少ない者は、成績が向上しなかった。また、作文では、前者は副詞の使用頻度が増加した。後者は、副詞の使用頻度は増加しなかった。このことから、手話を利用した指導の効果は、学習者の手話の能力に規定されることが明らかになり、学習者の手話の能力を考慮して指導を計画する必要性を示唆した。

長南(2003)は、聾学校高等部生徒20人を対象として手話を使用した日本語の語彙(名詞、形容詞、形容動詞、動詞、副詞)指導を行い、その効果を学習者の属性との関連において検討した。指導条件には、文字・音声条件という従来の口話法に該当する方法と、手話条件という二つの条件を設定した。指導の後、事後テストを実施した。その結

果、成績の特徴から学習者を四つのグループに分類した。①手話条件においてのみ事後テストの得点に向上がみられたグループと、②両条件とも得点が高かったグループ、③文字・音声条件においてのみ得点が高かったグループ、④両条件においても、得点が低かったグループである。また手話表現能力が高い者に手話の使用が有効であった。さらに手話を利用することは、活用しない語と活用する語の語幹の学習を促進することを示唆した。

橋本ら(2012a)は、幼児期金沢方式による言語訓練中に人工内耳を装用した12例の就学後の問題点と対策について報告した。就学時までに3000語以上の文字言語理解を獲得した文字先行移行パターンを示した8例中7例は就学以降も学業に著しい問題を示さず、人工内耳においても文字言語の有用性を示唆した。幼児期に手話先行未移行パターン、文字先行未移行パターンを示した例は就学以降の言語習得に問題が多いことが分かった。人工内耳装用後も就学前に十分な言語力を獲得しておく必要性を示した。

佐々木ら(2017)は、学童期の聴覚障害児と健聴児の副詞表現について比較し、語彙発達に対する難聴の影響について検討した。副詞産出課題として主語と動詞の間に副詞を穴埋めする形式の短文、計15題を実施した。その結果、「程度副詞」「状態副詞」「擬音擬態語」について、健聴児は生活年齢との間に有意な相関を認めたが、聴覚障害児では全体として有意な相関を認めなかった。健聴児は、「ゆっくり」の多用が目立ったが、年齢が上がるにつれ語彙の幅が広がった。聴覚障害児でも健聴児同様の傾向がみられたが、語彙の種類は少なく特定の語彙の多用が目立った。「擬音擬態語」では健聴児は年齢に伴い豊かな表現に変化した。聴覚障害児は「大きな声で(ひそひそ)話す」など健聴児にはない表現がみられたと指摘した。

### (4) 言語発達に関する研究動向の分析

小島ら(1983)は、特異な経過をとった言語発達遅滞の1例(9歳男児)を報告した。幼児期前半は言語理解、表出ともなく、対人関係の孤立、行動異常をあわせ持つ重度知的障害児であった。理解は、視覚的理解が聴覚的理解に先行して得られ、対人関係の孤立も消失してきた。5歳10か月の初診時、発語失行が認められ、構音訓練を中心とした言語指導を開始し、急速な発語数の増大、知的機能の向上が得られた。8歳4か月時にはIQ(WISC)は104となった。軽微な発語失行と失文法の問題は残されていた。このような各種高次機能の不均一な成熟の遅れによってもたらされた特異な事例を報告した。

能登谷・鈴木(1984)は、2歳2か月から6歳7か月まで聴能訓練と文字言語を並行して指導した。聴力レベル98dBの一重度聴覚障害幼児の言語発達を検討し、音声言語に及ぼす文字言語の効果について考察した。その結果、①文字言語は音声言語より習得が容易であった。②文字言語から音声言語への移行が認められ、5歳0か月に音声言語の発達は文字言語のそれに追いついた。③本例が6歳7か月までに獲得した受信語彙数は、音声・文字言語とも約4000語に達した。同時期の音声発信語彙数は約3000語であった。④本例の6歳代における語彙、文、機能語の発達は同年齢の健聴児の発達レベルにほぼ相当したことを明らかにした。先行して習得された文字言語は、音声言語の発達を促進したと考えられ、早期からの文字言語の導入は、聴覚障害幼児の言語発達遅滞の改善に有効であると指摘した。

斎藤ら(2006)は、乳幼児期の言語訓練の成果と問題点を検討するために、先天性感音難聴児60名に対して就学時の言語評価を行った。その結果、①WISC知能検査では、言語性IQが平均よりも良好な症例が85%と多かったが、動作性IQと同等のレベルまでは到達せず言語性IQのほう

が有意に低い症例が32%存在した。②ITPAについては、「ことばの理解」「ことばの類推」「ことばの表現」は77%から91%の症例が能力相応もしくは成績良好だったが、「文の構成」は46%の症例が成績不良だった。③読書力診断検査は成績良好な症例が62%と多く、下位検査項目間には有意な得点差を認めなかった。④失語症構文検査は、61%の症例が成績不良であり、助詞や受身文の聴覚的理解力が不足している症例が多かった。⑤聴覚障害児においては助詞や動詞の活用など、文法の正確な理解が困難な症例が多く、読み書きの基礎を形成する上では、就学前からこれらの側面に配慮した指導を行うことの重要性を示唆した。

森・熊井(2012)は、補聴器装用の先天性重度難聴児2例の就学時と高学年時の言語発達経過を比較した。2例は裸耳および補聴能力が同程度で同時期から言語指導を開始し、就学時の言語聴取能、コミュニケーション手段、言語能力などに差がなかったが、就学後にも指導を継続した例と就学時に指導を中断した例では高学年時の言語聴取能、コミュニケーション手段、言語性知能、語彙年齢、読書力、作文能力、構音明瞭度に差がみられた。指導継続例では中学年頃まで読解・作文力に遅れがみられたが、語彙力、文法力、読書力、作文能力の基礎となる指導を中学年時まで行い、4年生から読解・作文指導に重点を置いた指導を行った結果、高学年時には学年相応の読解・作文力が獲得されたことを示した。

### (5) その他の論文の研究動向の分析

澤(2009)は、過去10年ほどの国内外の研究を中心として、聴覚障害児における言語の理解と産出について言語学的観点から考察するとともに、今後の言語獲得研究の方向性について展望した。先行研究を「統語」「意味」「使用」の観点から整理し、各観点について、生成文法理論による統語能力の解明、統語処理における意味情報の利用、発話・作文における語の使用に関する研究の成果と残された課題について述べた。従来の言語獲得研究は、生成文法理論などに基づく統語能力の解明を軸として進展してきた。一方、近年では認知言語学や用法基盤モデルといった新たな理論が発展しつつあり、聴覚障害児の言語研究においてもことばの意味や使用の側面を重視した研究が必要であることを指摘した。

斎藤(2006)は、聴覚障害児のリテラシーは個人差が大きく、平均的には読書力、作文力とも遅れや偏りがみられることを指摘した。リテラシー形成には音韻意識および言語概念への気付きが重要であるが、聴覚障害児は補聴による矯正に加えて、視覚的情報や筋肉感覚、かな文字などを拠り所にさまざまな感覚を協働させ、時間をかけて特有の音韻意識に至ると考えられる。音韻意識の定着や日本語による概念の理解を促す指導、さらに小学校、中学校段階でのリテラシー形成にかかわる息の長い教育的支援の必要性を述べた。

## 2 全体考察

聴覚障害児を対象とした作文の指導に関する研究の動向からみえる作文指導の実際と課題を明らかにし、今後の作文指導の在り方を検討していく。

作文をテーマとした論文では、就学前期から小学低学年までの言語獲得の重要性および言語力、聴力を考慮した作文指導の必要性や聴覚障害児の作文内容の特徴、健聴児の作文内容との比較が多かった。聴覚障害児の作文能力の特徴として、「文法的側面の弱さ」(小林・田中:1986)、「語彙の不足、助詞の誤用、動詞の産出困難、自分の思考や感情を表現することの困難、表現がパターン化して広がらない」(田中・斎藤:2007)、「単純な文構造と文法的誤り」(大森・澤:2008)、「濁点の誤りと他の特殊音節の表記の誤り」

(茂木・澤・四日市:2012)、「格助詞の誤用」(澤:2010)、「文数の短さと文内の整合性の欠如」(佐々木:2016)など全般的にことばの遅れや偏り、文構造と文法的誤りに関する内容が多く挙げられた。

作文指導の実際では、語彙を拡充していくことや文法的に正しい文を書くことに重点が置かれていた。語彙の拡充を促すための手立てとして、「手話を利用した指導」(長南:1997, 2003)や「文字情報を活用した指導」(能登谷・鈴木:1984, 橋本ら:2012a)などがあつた。手話の活用に関しては、その効果が学習者の手話の能力に規定されたり、手話表現能力が高い者に手話の使用が有効であったりすることが示された。一方、Obermeier et al.(2012)は、日常生活において最適レベルには達しないコミュニケーション状況にあることが常態化している聴覚障害者が自動的にジェスチャーを理解に組み入れていることを示唆した。よって、手話を活用した指導方法が効果的である学習者の条件については、さらに検討していくことが求められる。文法指導として、「格助詞が変われば文の意味が変わるということを描や実物を提示することによって理解させるという指導プログラム」(保坂:1980)や「各種の品詞を含む語連鎖の導入時期と方法を配慮することによって文構造の獲得を促進させる指導」(倉内:1992)、「重度聴覚障害児の初期の言語指導法として文字言語を活用した指導」(能登谷:1992)、「幼児期早期より日本語の文構造に沿った日本語対応手話による単語(助詞は指文字または手話)を用いた指導」(橋本ら:2012b)、「幼児期における手話を活用した文指導」(原田ら:2013)などがあつた。聴覚情報の欠如による文法規則の不十分さを補填するため、絵や実物、文字、手話など視覚的情報を活用した指導が早期に実施されていることを明らかにした。

以上のことから、聴覚障害児を対象とした作文指導の実際では、語彙を拡充したり助詞の欠落や誤用を解決したりする手立てが多くみられた。聴覚情報の欠如を補填するために、文字や絵、実物など視覚的に分かりやすい手段を導入することや、コミュニケーション手段である手話を活用しながら指導していくことの有用性が示された。

今後は、学童期における文章レベルの多様な作文指導を検討していくことが課題である。文章レベルでの作文指導では、作文前に児童が作文内容を構成したり、作文中に内容の修正や加筆したりすることを促す必要がある。従来までの作文後の評語を中心とした作文指導ではなく、作文のプランニングや作文内容のモニタリングを意識させる指導が必要である。そのためには、「曖昧な内部表象を外化させることで、意識化・明確化することができるのではないか」という海保(1993)の説からも、作文内容を視覚的に捉えることができるように絵や図などの視覚的情報を活用した作文指導を検討することが求められる。

### おわりに

本研究では、聴覚障害児を対象とした作文の指導に関する研究の動向からみえる作文指導の実際と課題を明らかにすることを目的とした。作文指導の実際では、約40年前から早期に語彙の拡充を促したり助詞の欠落や誤用を解決したりするための指導が行われてきたことを明らかにした。その際、早期に言語と接することができるように文字や絵、実物、手話などの視覚的情報を活用し、聴覚情報の欠如を補填する手立てが講じられていた。それらの手立ては、乳幼児期における言葉の初出時期の遅れと使用頻度の少なさを補い、言語獲得を促すと考える。今後、学童期における文章レベルの作文指導において、絵や図などの視覚的情報を活用した作文指導方法を児童の実態に即して検討していくことを課題として挙げた。その際、聴覚障害児の言語発達は個人差が大きいことが



指摘されているため、考案した作文指導方法が効果的である学習者の条件に関しても検討していくことが求められる。

## 註1)

平成10年告示の小学校学習指導要領国語科からは、それまで書くことの領域で使用されていた「作文」という用語が見られなくなった。そこで、「聴覚障害児」「書くこと」「指導」という三つをキーワードとして、データベース検索から抽出した(2018年11月14日)。その結果、29件あった。本研究で採用した論文は9件含まれていた。能登ら(1986)「難聴児のインテグレーション成績と高度難聴乳幼児における手話の獲得」の論文以外の19本は、採用基準を満たしていなかった。よって、本研究では、「聴覚障害児」「作文」「指導」の三つをキーワードとした。

## 引用文献

- 橋本かほる・能登谷晶子・原田浩美・伊藤真人・吉崎智一(2012a) 幼児期金沢方式による言語訓練中に人工内耳を装用した12例の就学後の問題. AUDIOLOGY JAPAN, 55巻, 2号, 132-137.
- 橋本かほる・能登谷晶子・原田浩美・伊藤真人・吉崎智一(2012b) 金沢方式による言語指導を受けた聴覚障害幼児4例の格助詞の獲得. 音声言語医学, 53巻, 4号, 336-340.
- 原田浩美・能登谷晶子・橋本かほる・伊藤真人・吉崎智一(2013) 聴覚障害幼児への文の指導. 音声言語医学, 54巻, 2号, 136-144.
- 廣田栄子・小淵千絵・木暮由季(2007) 聴覚障害児における物語産生能力の評価法の検討. AUDIOLOGY JAPAN, 50巻, 5号, 581-582.
- 保坂真理(1980) 聴覚障害児における構文の指導について(1): 単文の習得. 特殊教育学研究, 17巻, 4号, 12-21.
- 海保博之(1993) ヒューマン・エラーとセルフ・モニタリング. 現代のエスプリ: 心・状況の変化を読み取る, 314, 55-64.
- 小林はるよ・田中美郷(1986) 難聴学級児童の言語力の経年的観察(2). 音声言語医学, 27巻, 3号, 229-234.
- 小池将貴(1995) 多様な評価者による聴覚障害学生の作文の評価. 特殊教育学研究, 33巻, 3号, 23-31.
- 小島千枝子・横地健治・岡田真人(1983) 聴覚言語理解の障害と発語失行をあわせ持った言語発達遅滞の1例. 音声言語医学, 24巻, 4号, 225-234.
- 国立特別支援教育総合研究所(2010) 聾学校における授業とその評価に関する研究: 手話活用を含めた指導法の改善と言語力・学力の向上を目指して. 専門研究B研究成果報告書.
- 倉内紀子(1992) 高度難聴児の言語指導プログラムとその検証: 語連鎖の獲得過程を中心に. 特殊教育学研究, 29巻, 4号, 39-47.
- 茂木成友・澤隆史・四日市章(2012) 重度聴覚障害児童における表記上の誤りの発達の変化. 特殊教育学研究, 50巻, 2号, 161-169.
- 文部科学省(1998) 小学校学習指導要領(平成10年告示). 森つくり・熊井正之(2012) 補聴器装用の先天性重度聴覚障害児童への就学後の言語指導と言語発達経過: 就学後に言語指導を継続した1例と中断した1例の比較. AUDIOLOGY JAPAN, 55巻, 6号, 650-661.
- 長崎勤・鈴木和子・長崎裕子(2000) 子どもはどのように

- して自己経験を物語るのか?: 健聴児と難聴児の報告活動の分析を通して. 心身障害学研究, 24, 123-135.
- 能登谷晶子・鈴木重忠(1984) 難聴幼児の言語発達と文字言語の役割. 音声言語医学, 25巻, 2号, 140-146.
- 能登谷晶子・鈴木重忠・古川侃・梅田良三(1986) 難聴児のインテグレーション成績と高度難聴乳幼児における手話の獲得. 音声言語医学, 27巻, 3号, 235-243.
- 能登谷晶子・鈴木重忠・手取屋浩美・古川侃(1992) 早期から手指法を導入した重度聴覚障害幼児2例の言語発達. 日本耳鼻咽喉科学会会報, 95巻, 9号, 1360-1365.
- Obermeier, C., DoiK, T., & Gunter, T.C. (2012) The benefit of gestures during communication: Evidence from hearing and hearing-impaired individuals. Cortex, 48, 857-870.
- 大森梨早子・澤隆史(2008) 聴覚障害児童・生徒の書く文の発達の変化: 文構造と容認性の観点から. 特殊教育学研究, 46巻, 4号, 205-214.
- 龍崎麻由実・伊藤友彦(1999) 聴覚障害児の受動文における統語知識: 項構造と句構造を中心にして. 特殊教育学研究, 36巻, 4号, 23-30.
- 齋藤佐和(2006) コミュニケーション方法とリテラシー形成(特別発言). 音声言語医学, 47巻, 3号, 332-335.
- 斎藤宏・工藤多賀・堀内美智子・小寺一興(2006) 補聴器装用児における乳幼児期の言語訓練の成果と問題点. 音声言語医学, 47巻, 3号, 306-313.
- 佐々木志保・小淵千絵・川瀬哲明(2016) 学童期における書記言語能力の発達に関する検討: 定型発達児と聴覚障害児のまんがの説明課題での比較から. AUDIOLOGY JAPAN, 59巻, 5号, 469-470.
- 佐々木志保・小淵千絵・川瀬哲明(2017) 学齢児における副詞表現の発達: 聴児と聴覚障害児の比較から. AUDIOLOGY JAPAN, 60巻, 5号, 344.
- 澤隆史(2009) 聴覚障害児の言語の理解と産出に関する言語学的研究. 特殊教育学研究, 47巻, 4号, 255-264.
- 澤隆史(2010) 聴覚障害児の作文における格助詞の使用と誤用. 音声言語医学, 51巻, 1号, 19-25.
- 関圭子・草薙進郎・都築繁幸(1982) 聴覚障害児の語彙理解における単語分類能力と単語理解能力との関係について. 特殊教育学研究, 20巻, 3号, 44-54.
- 田中耕司・斎藤佐和(2007) 聴覚障害児の書記表現力の指導に関する調査. 特殊教育学研究, 45巻, 3号, 137-148.
- 都築繁幸(1980) 聴覚障害者の言語学習に及ぼす文脈化の効果. 特殊教育学研究, 18巻, 1号, 26-34.
- 長南浩人(1997) 手話を利用した日本語の語彙指導に関する事例研究: 副詞の指導について. 特殊教育学研究, 34巻, 5号, 91-98.
- 長南浩人(2003) 聾学校高等部生徒の日本語の語彙指導における手話使用の効果. 特殊教育学研究, 41巻, 3号, 325-334.

【連絡先 檜垣栄慈 higaki1194@gmail.com】

# **Introduction to composition guidance research for hearing impaired children: Research trends and raising of visual information utilization**

Eiji Higaki

Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education,  
Aichi University of Education of Education & Shizuoka University

## **ABSTRACT**

In this study, we examined the essay guidance of hearing impaired children. The paper extracted from the paper searched database “J-STAGE” by keywords of “hearing impairment child” “composition” “teaching method”, and the actual facts and problems of composition guidance which can be seen from the tendency of research on the teaching of compositions for hearing impaired children were used as the source of information. The purpose is to clarify the practical problems and tasks of composition guidance that can be seen from the tendency of the research on the teaching of composition for hearing impaired children. As a result of organizing the papers, the contents related to linguistic and biased words, sentence structures and grammatical errors were generally dominated. In grammar guidance and expansion of vocabulary, the good effect of using character information early or using sign language was shown much. We also clarified that it is important for teachers to instruct teaching methods those utilize visual information such as letters, sign language, or pictures and diagrams in accordance with the actual conditions of children in composition guidance. From now on, in order to develop the ability to plan composition and monitor composition contents, it is necessary to consider teaching methods those utilize visual information that can visually grasp the composition contents.

## **Keywords**

hearing impaired children, composition, teaching method, visual information utilization